

大阪は「まち」がほんまにおもしろい

大阪あそび歩

OSAKA ASOBO

⑤ 淀川神社

いい伝えによれば、淀川河口の海賊取り締まりのため配備された武士が、当時有名だった15の神社の神様を守護神としてまつたのが起こりで、名前も十五神社と呼ばれていました。明治42年(1909)、毛馬村の氏神、八幡大神宮が櫻宮に、友洲村の氏神、十五神社が大宮神社に合祀されましたが、これによって心のよりどころを失った毛馬、友洲、大東3町の人たちの熱心な働きかけで昭和28年(1953)10月、旧十五神社の神殿と境内をそのまま利用した形で復活。現在の名で呼ばれるようになりました。

⑥ 蕪村公園

平成22年(2009)3月に開園したばかりの蕪村を顕彰する公園(約1ha)です。「春風馬堤曲」に詠われている毛馬の堤を再現し、淀川原ののびやかな広がりのある風景が表現されています。園内には、蕪村自筆の13句を刻んだ句碑が並べられています。松尾芭蕉、小林一茶とともに近世俳諧史を彩った蕪村は、浪漫的、抒情的な俳風を築き、生涯で3000近い句を詠んでいます。13句はその代表作ともいえ、多くは生まれ故郷、毛馬を詠んだ作品が連ねられています。

⑦ 蕪村生誕地の石碑

江戸・天明期の俳壇革新者であり、南宋画の開拓者、俳画の創始者といえる与謝蕪村は享保元年(1716)、摂津国東成郡毛馬村(大阪市都島区毛馬町)に生まれました。二十歳のころには江戸にあり、夜半亭宋阿に師事し、俳諧を学びました。寛保2年(1742)27歳のとき、師の死にあって江戸を去り、下総国結城(茨城県結城市)を拠点にあこがれていた松尾芭蕉の足跡をたどって東北を周遊するなど、俳諧の道と画技を磨きました。その後、丹後・与謝地方で4年余を過ごし、36歳で京都に居を構え、画業に専念します。45歳のころ結婚。娘の誕生からしばらくして讃岐へと旅立ち、55歳で師を継ぎ、夜半亭二世に推戴されました。このあたりから、「春風馬堤曲」「瀬川歌(でんごのうた)」「老鶯児(ろうおうじ)」の三部作を刊行した62歳ごろが蕪村の絶頂期といえます。天明3年(1783)12月、「しらねにまる夜ばかりとなりけり」の辞世句を残し、68歳でなくなりました。墓は芭蕉庵のある京都市左京区一乗寺、金福(こんぶく)寺にあります。

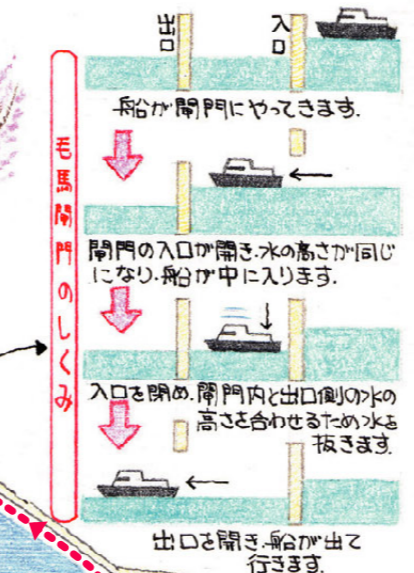
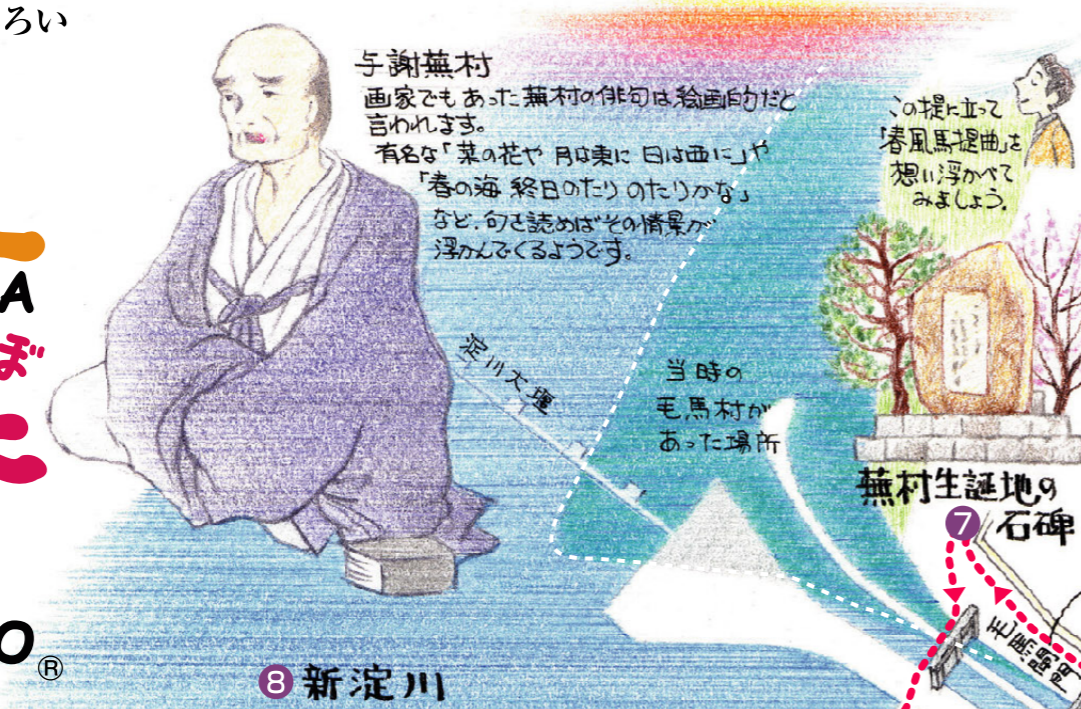
【注意事項】 この地図は「大阪あそび」のまち歩き資料として作成されました。まち歩きには、歩きやすい服装と靴を着用してください。車などによく注意し、各自で責任をもって行動してください。また、住宅地では住民のプライバシーに十分配慮して歩きましょう。
【お問い合わせ】 大阪コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会「大阪あそび」事務局 電話06-6282-5930(財団法人大阪コンベンション協会内)
「大阪あそび」の詳しいプログラムはホームページをご覧ください。http://www.osaka-asobo.jp または「大阪あそび」でネット検索を。

大阪あそび歩のコースは約2~3km、2~3時間程度を基準として作成されています。

水の底に消えた蕪村のふるさと・毛馬村

~春風や 堤長うして 家遠し~

俳人・与謝蕪村は享保元年(1716)、毛馬村に生まれました。若き頃に江戸を出て、芭蕉の足跡をたどって東北を周遊。その後、京に居を構え、大坂にも何度も立ち寄りますが、なぜか自分の生まれ故郷には一度も帰ろうともしませんでした。新淀川開削で消えてしまった蕪村のふるさと・毛馬界隈を歩きます。



毛馬開門は水面の高さが違う川同士(淀川と大川)と大阪市内の川(土佐川)と船が行き来できるように造られた二重の水門です。



【百年前の毛馬開門】
右の現在の地図とほぼ同じですが、100年前の川幅は、ずいぶん狭かったようです。開門の位置は、現在とは逆の西岸にありました。

① 駒つなぎの楠

平安中期、このあたり一帯は「善源寺荘」と呼ばれ、大江山の酒呑童子を退治した源頼光が支配する荘園でした。頼光は長徳年間(995~998)、ここに武神・八幡大神をまつたさいに自ら楠を植えました。この地の管理を任されていた頼光四天王の筆頭、渡辺綱が、この楠に馬をつないで参詣したことから「駒つなぎの楠」と呼ばれました。樹齢900年、周囲12m、高さ約30mの大樹で、昭和初期、大阪府の天然記念物第一号に指定されましたが、戦災で枯れ死しました。しかし、その後も倒れず現在にいらっています。

② 大川(旧淀川)

もともとは淀川の本流でしたが、明治後期の淀川改修工事で毛馬の洗堰、開門が作られた際、そこから下流の大坂湾に注ぐ旧淀川13.83kmを大川と呼ぶようになりました。それそれの時代の大阪の繁栄を担った河川で、現在は、中之島で堂島川、土佐堀川と分かれるなど、区間によってさまざまな通称で呼ばれています。寝屋川と合流する地点のすぐ先は、江戸時代に京・伏見と大阪を往復した三十石船の大阪側のターミナル、八軒家浜船着場。飛鳥時代には難波津、平安時代には渡辺津と呼ばれた要衝です。古くは蟻の熊野詣の公家たちから弥次さん喜多さん森の石松、幕末の志士たちまでが乗ったという三十石船(長さ約15m、幅1.9m、定員28人)は、昼夜、上下便あわせて毎日320便、約9000人が利用したといわれ、大変な賑わいでした。

③ 毛馬桜之宮公園

大川の毛馬橋から天満橋までの両岸(延長4.2km)に広がるリバーサイドパークです。もともと「水辺より馬場の堤に至るまで一円の桜にして晩春の花の盛りには雲と見、雪と疑う光景なり。最上(の花見の勝地といふべし)」「淀川兩岸一覽」といわれたように、江戸時代から桜の名所として親しまれてきました。たびかさなる淀川の氾濫で桜も倒れたりしましたが、そのたびに植え替えられました。大正12年(1923)に開園した桜之宮公園を中心とした大川両岸の公園整備が、明治100年記念事業として昭和42年(1967)から始められ、南天満、桜之宮、毛馬を含んだ23余haの大公園が完成。両岸の桜は4800本に達し、大阪城周辺(4300本)をしのぐ西日本有数の桜の名所としてよみがえりました。

④ 春風(はるかぜ)橋

淀川にほぼ平行して伸びる城北運河の大川からの分岐点にかけられた歩行者自転車道路橋(幅3m、長さ105m)で、昭和56年(1981)3月に完成しました。橋の名は、与謝蕪村の句「春風や堤長うして家遠し」になんぞつけられました。この句は蕪村の最高傑作ともいえる抒情詩「春風馬堤曲」の発句で、「やぶ入りや浪花を出て長柄川」と並んで出てきます。やぶ入りで大阪の町なかの奉公先から実家へ帰る娘に託し、わが生誕の地・毛馬村への望郷の念を18首の歌に読み込んだ、蕪村62歳の作品です。最初に短い詞書があり、発句二つ、続いて漢詩、また句がくるという当時としては大胆な構成で、最後は俳句仲間の句「敷入の寝るやひとりの親の側」というやぶ入りの句で締めくくっています。十代後半には両親ともなくなり、家は没落、そして出奔。二十歳のころには江戸にあり、京都で68歳の生涯を閉じるまで、二度と毛馬の地を踏まなかった蕪村ですが、失意のうちに幼い日々を過ごした淀川べりの村を終生忘れることはなかった、といえるでしょう。

⑨ 毛馬洗堰、毛馬開門

新淀川開削を含む淀川改修工事で計画され、明治40年(1907)8月、普段の川の水を流すための「毛馬洗堰」と、水位が違う大川、新淀川間の船舶の通過をスムーズにする「毛馬開門」とが完成しました。開門は沖野忠雄の指導で作られ、両岸はレンガ造り。水路の前後に鉄製観音開きの制水扉が設置され、両岸からハンドルを回して開け閉めしました。しかし、その後の大川しゅんせつ工事で水位が大きく下がり、淀川との水位差が広がって役に立たなくなったため、大正7年(1918)、この開門下流に二つ目の開門が作られました。現在使用されている開門は3代目、昭和49年(1974)に完成しました。旧毛馬洗堰と初代開門は貴重な近代産業遺産として平成20年(2008)6月、国の重要文化財に指定されました。

⑩ 毛馬橋

蕪村の毛馬村は淀川の左岸。対岸は北長柄村で、両地点を毛馬渡しが結んでいました。長さ190間(約365m)。蕪村が門人に送った手紙の中で「堤二は往来の客あり」としたのは、この渡し舟に急ぐ人々の姿でした。この下流には源八渡し、川崎渡しが続きます。ここに初めて橋がかけられたのは大正3年(1914)。地元の熱心な運動が実りました。長さ155m、幅3.6mの木橋で、毛馬橋第一号です。現在の姿になったのは昭和36年(1961)です。

